

# 電気のふるさと

電源地域ニュース

## 鹿児島県薩摩川内市 特集号

トップにきく

岩切 秀雄 さん × 新 欣樹

(薩摩川内市長)

(財団法人電源地域振興センター理事長)

PICK UP!

人と自然のアートで輝く「宝の島」  
～甌島が描く交流による未来のデザイン～

センター掲示板

電源地域振興センターの平成22年度事業の概要  
平成22年度上期原子力発電施設等  
周辺地域企業立地支援給付金について 他

産品自慢

丹後藤布 (京都府京丹後市)





東シナ海が育んだ新鮮な海の幸をふんだんに使った郷土料理。季節ごとの旬の魚が味わえる。



「美人の湯」として名高い市比野(いちひの)温泉。他に川内高城(せんだいたき)温泉など多くの温泉がある。



薩摩川内に初秋を告げる伝統行事「川内大綱引」。上半身裸の若者たちが大綱をめぐり、激しくぶつかり合う。

### 豊かな自然、地域と産業が共存する薩摩川内

**新・薩摩川内市**は、東シナ海に面した変化に富む白砂青松の海岸線や市街部を悠々と流れる川内川、蘭牟田池をはじめとするみどり豊かな山々や湖、変化に富んだ地形が美しい甌島、温泉など多種多様な自然環境が溢れ、そこで育まれた美味しい食べ物も多いまちですね。

**岩切市長**…そのとおりです。薩摩川内市は、川内川流域県立自然公園や蘭牟田池県立自然公園、甌島県立自然公園など美しい自然に囲まれています。

また、かつては国府がおかれ、古くから南九州における政治、経済、文化の中心地として栄えてきました。このような歴史を背景に、有島三兄弟や山本実彦など、多くの文化人を輩出してきました。

食文化に目を向けますと、県内一の出荷量を誇るキビナゴをはじめ、伊勢エビ、アジ、メジナなどの海産物、そして薩摩地鶏、さらには、キンカンやブドウなどの果物など、大変充実しています。もちろん焼酎も多くの蔵元が名を連ね、味わい深い銘柄がそろっていますよ。

**新・産業や伝統行事の面では**、甲冑の製造や少し変わったルールの大綱引があるとか。

トップに  
きく

## 鹿児島県薩摩川内市

### 岩切秀雄さん×新欣樹

(薩摩川内市長)

(電源地域振興センター理事長)

原子力をはじめとする様々な産業と豊かな自然が共存する薩摩川内市。大合併から五年を経て、市民が創り市民が育む交流躍動都市の実現に向け、「薩摩川内スピリッツ」の精神を旨に邁進する岩切市長にお話を伺う。



薩摩川内市長  
いわき ひでお  
岩切 秀雄 さん

昭和17年生まれ。昭和38年川内市役所に就職後、昭和45年に鹿児島県地方課へ派遣。その後、川内市役所で、県内でいち早く、庁舎内の電算システム構築に尽力。昭和60年からは企画調整課長、企画財政部長、総務部長を歴任。平成9年から川内地区消防組合消防長、助役を歴任。平成16年、市町村合併後、薩摩川内市助役、副市長を経て、平成20年11月より薩摩川内市長に就任。

#### ■鹿児島県薩摩川内市 (人口: 約102,000人 面積: 683.50km<sup>2</sup>)

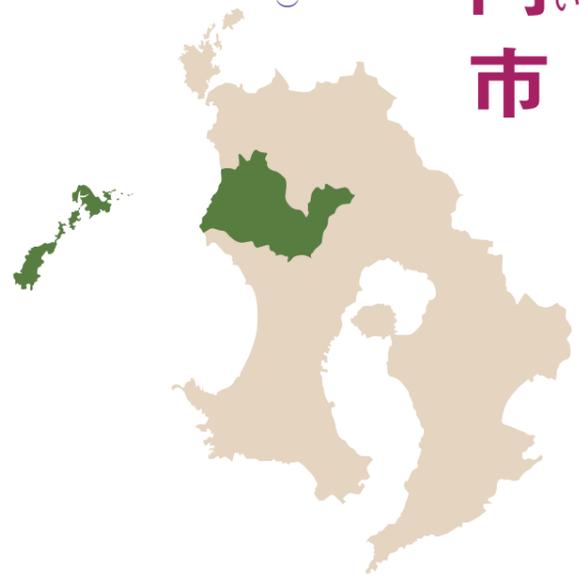
平成16年10月12日、川内(せんだい)市、樋脇(ひわき)町、入来(いりき)町、東郷(とうごう)町、祁答院(けどういん)町、里(さと)村、上甌(かみこしき)村、下甌(しもこしき)村、鹿島(かしま)村の1市4町4村が合併し、鹿児島県における平成の大合併の第1号として誕生。薩摩半島の北西部に位置し、東シナ海に面した白砂青松の海岸線、市街部を流れる一級河川「川内川(せんだいがわ)」、ラムサール条約に登録されている「蘭牟田池(いむたいけ)」、地形の変化の美しい「甌島(こしきしま)」など、多種多様な自然環境を有し、国内でも稀なカラフトワシの越冬地でもある。

#### ■発電所データ

川内原子力発電所  
出力: 178万kW(1~2号機計) 運転開始: 昭和59年7月(1号機)  
事業者名: 九州電力株式会社  
川内火力発電所  
出力: 100万kW(1~2号機計) 運転開始: 昭和49年7月(1号機)  
事業者名: 九州電力株式会社

#### ■今号の表紙

下甌島のナポレオン岩(鹿児島県薩摩川内市)



**岩切市長**…そうですね。本市には甲冑の生産量が全国一の企業があり、NHK大河ドラマなどで使用される甲冑のほとんどがこのまちで生まれています。最近では、結婚披露宴で新郎がこの甲冑を身にまとい登場するといった面白い演出にも使われていると聞いています。

「川内大綱引」は、長さ三百六十五メートル、重さ五トンの大綱をめぐって三千人を超える若者が引き合うのですが、押し隊という攻め手が相手の引き手を妨害する「押し合戦」は迫力満点で「ケンカ綱」と言われる由縁ともなっています。薩摩の名将島津義弘が兵士の士気を鼓舞するために始めたともされる四百十年の歴史をもつ伝統行事で、毎年九月に開催され、この時期になるとまちに活気が溢れます。

**新・それは、勇壮な綱引きですね。**市外からも多くのお客さまが見物に来られると聞いていますが、交通のアクセス面はいかがでしょうか。

**岩切市長**…交通面では、一部開業した九州新幹線や南九州西回り自動車道など高速交通網の整備が進められるとともに、貿易・流通の拠点として将来性のある川内港を有しています。

また、薩摩川内市は、原子力発電所と火力発電所を有するエネルギー供給基地として国の経済活動を支える大切な役割を果たしているとともに、市内の様々なところで産業が発展し、地域と共存しています。

### 宝の島、甌島

**新・風光明媚な甌島には、「トシドン」という伝統行事があると聞いておりですが、「トシドン」とは一体どのようなものでしょうか。**

**岩切市長**…「トシドン」は、シユロの皮やソテツの葉などを使い、鼻の



長い恐ろしい顔をしています。どこか南国的でユニークな甑島の歳神様です。毎年大晦日の夜に、子供のいる家々を訪れ、子供をしかたり論したりしながら、最後には良い子になる約束を取り付け、子供の幸福を願って帰っていきます。国の無形民俗文化財の「トシドン」は、子供の情操教育・躰に役立つとともに、子供の幸福を願う貴重な伝統行事であり、昨年九月にユネスコ無形文化遺産に登録されました。

**新**それは非常に貴重な伝統行事ですね。甑島にはほかにも多くの話題があるようです。

**岩切市長**…そうなんです。一昨年二月、下甑島で発見された肉食恐竜の

化石は、国内で最も時代が新しい発見例の一つとして、日本古生物学会で発表されるほどの貴重なものでした。豊かな自然に目を向けますと、国土交通省の「島の宝百景」に選定された「里町の玉石垣」、「日本の地質百選」に選定された「甑島の白亜紀―古第三紀層」などもあります。また、「こしきアートプロジェクト」と「里地区コミュニティ協議会」による「甑島で、つくる。」は、活力協働まちづくり推進団体の全国グランプリを受賞しました。このように甑島では、九州全域を見渡しても類を見ないほどの地域資源の掘り起こしが進んでおり、まさに宝の島と言えます。



電源地域振興センター理事長

あたらしく **新 欣樹**

昭和18年生まれ。昭和40年、通商産業省入省。科学技術庁長官官房長を経て、中小企業庁長官などを歴任。石油公団理事などを経て日本原子力発電株式会社副社長、平成21年7月より財団法人電源地域振興センター理事長。

## 今後の課題と展望

**新**九州新幹線「つばめ」の全線開業は、薩摩川内市にとって非常に重要なポイントになります。

**岩切市長**…九州新幹線の全線開業までいよいよ一年余りとなりました。甑島をはじめ、ラムサール条約に登録されている蘭牟田池、中世の武家集落の名残をとどめる入来麓武家屋敷群、西郷隆盛も利用したと伝えられている川内高城温泉など、本市の豊富な観光資源と九州新幹線全線開業を、観光客の誘致にうまく結びつけていきたいと考えています。

そのほかにも薩摩川内市においては大きな事業が目白押しで、この重要な時期に市政を担う身として、私も身が引き締まる思いです。

**新**川内原子力発電所三号機増設、県の産業廃棄物処分場の建設など、市にとって今後非常に大きな影響を与える案件が控えていますね。



九州新幹線「つばめ」。平成16年3月、鹿児島中央～新八代間で先行開業（新八代～博多間は「リレーつばめ」に乗り換え）。来年3月の全線開業に向け準備が進んでいる。

**岩切市長**…ええ。川内原子力発電所三号機に関しては、昨年一月八日、九州電力(株)から環境影響評価準備書の報告とあわせて、増設の申し入れがありました。十月には、県知事意見、環境大臣意見を受けた経済産業大臣から九州電力(株)に対し、同準備書に対する勧告がなされ、九州電力(株)は今年一月に、経済産業大臣に評価書を届け出ました。そして二月、経済産業大臣から、評価書の変更を必要としないとする確定通知が九州電力(株)になされました。

県産業廃棄物管理型最終処分場については、県から基本計画が公表され、平成二十三年度着工、平成二十五年度の供用開始の方針が示されましたが、県に対して引き続き、地元住民の理解に向けた取り組みや丁寧な説明を行うよう求めているところです。

いずれも、市民を二分するような出来事ではありませんが、私はこれを市民が一つになって市政に参画するまたとないチャンスであると考えています。行政の主役は市民であり、市民の声を聴く行政でなければなりません。議会で十分に論議し、最終的には市民の声を聴き、判断していきたいと思えます。

**新**…そのほか、現在取り組んでおられること、今後の課題や展望について教えてください。

## 市民が主役のまちづくり

**新**薩摩川内市は、平成十六年に一市四町四村の合併により誕生しましたが、市長のまちづくりに対するお考えをお聞かせください。

**岩切市長**…薩摩川内市では、第一次薩摩川内市総合計画において、「地域力」が奏でる「都市力の創出」という基本理念を掲げるとともに、市民の一体感の醸成という観点から「市民が創り、市民が育む、交流躍動都市」を将来都市像とし、その実現に向けて政策を展開しています。現在、当総合計画の折り返し地点にあたることから、これまでの中間的総括を行うとともに、社会経済情勢の急激な変化に弾力的に対応するため、基本構想の一部変更と下期基本計画の策定を行っているところです。

**新**…下期基本計画については、昨年度、私どもで計画策定の基となる基本調査のお手伝いをさせていただきましたところですが、本当に、薩摩川内市では市民が主役のまちづくりに非常に力を注いでおられますね。

**岩切市長**…ええ。「市民まちづくり研究会」の設置や「まちづくり意見交換会」の開催、パブリックコメントを実施し、広く市民の声を聴いています。研究会からは、まちづくり



入来麓武家屋敷群。薩摩藩随一の堅城であった清色(きよしき)城跡を中心に、玉石垣による整然とした区画割や武家屋敷門(茅葺門)など、中世の史跡・文化財が残る。

**岩切市長**…薩摩川内市の特色や魅力を市内外に売り込むためには、シテイセールズが重要な政策であると考え、現在新たに取り組んでいます。薩摩川内市の知名度や好感度を上げるために、「イメージアップ」、「観光・プロスポーツ等集客」、「商品発見・開発」などの五つの視点から、元気の薩摩川内市をどんどんPRしていきたいと考えています。

スポーツ交流では、昨年の秋、世界大会を控えた全日本男子・女子バレーボールチームが合宿を行いました。また、「サンアリーナせんだい」では、プロ野球選手によるキャンプや自主トレが行われ、期間中、市内はもとより県内各地からの見物客でたいへん賑わいました。特に子供たちは、一流選手のプレーを間近に見



甑島列島。川内川河口の西方、東シナ海上約26kmのところに、上甑島・中甑島・下甑島の3島が連なる。ウミネコ繁殖の南限としても知られる。

について合併後五年間の振り返りや今後の方向などの提言書が出され、意見交換会では、五百十五件もの意見・要望等が出されました。また、自治総合審議会による答申も受けたところであり、これらは、主に基本構想における重点的取り組みや下期基本計画へ反映させて参ります。

また、目指すべき将来都市像の実現に向けて、

- ・九州新幹線全線開業の効果を最大限に活かした「戦略的なシテイセルスの推進」
- ・高齢者の豊富な経験や知識、技能と各地域の個性や資源を生かした「集落の活性化」(ゴールド集落支援の推進)
- ・宝の島、甑島を中心とした「観光関連産業の振興」
- ・中心地域と周辺地域が有する機能の相互連携・協力による「定住自立圏構想の推進」

などを主な取り組みとして、政策を展開していくこととしています。

て大いに刺激を受けたようです。また、市内の農家に関東・関西地区の中・高校生を修学旅行体験学習として受け入れるグリーンツーリズムも進めています。参加した子供たちは、初めての農業体験の中で人情味溢れる農家の方と交流し、豊かな自然に触れ、喜んで帰っていきます。これらを通じて、交流の輪と薩摩川内市の魅力が全国に広がることを期待しています。

これからも次代を担う子供たちに夢を与えるような素晴らしい取り組みを続けるとともに、地域おこしや情報発信にも力を注ぎ、元気なまちづくりを進めていきたいと思えます。

**新**…市と市民の皆さまが一丸となつて取り組み、薩摩川内市が一層発展していくことを楽しみにしています。本日はありがとうございました。



蘭牟田池。希少野生生物であるベッコウトンボが生息する。平成17年11月にラムサール条約の登録湿地となった。釣りやボート遊び、散策、サイクリングなど、四季を通じてレジャーが楽しめる。

# 人と自然のアートで輝く「宝の島」

〜 甌島が描く交流による未来のデザイン〜

「KOSHIKI ART PROJECT」が、全国自治体フェアでグランプリを受賞した。故郷を愛する若者たちの行動力と創造力を起爆剤として、地域の活性化に取り組み甌島と、それを応援する薩摩川内市の活動にスポットを当てる。



## 概要

若者たちによるアートを核にしたユニークな交流プロジェクトが、昨年、自治体総合フェア二〇〇九「第一回活力協働まちづくり推進団体表彰」でグランプリに輝いた。近年、甌島、そして薩摩川内市では観光振興に積極的に取り組みつつあったが、この出来事をきっかけに、さらなる動きを見せようとしている。何がこのムーブメントの原動力となったのか。市が「宝の島」と呼ぶ甌島の魅力とは何か。そして島と市は、どんな十年、二十年後の未来図を描いているのだろうか。

### 若い創造力が島民を刺激

本土から離れた素朴な甌島で強引に開催し、続けてきたアートによるプロジェクト。島にやってきた若いアーティストたちと、地元の住民たちが受けた刺激とは。島の中で何が変わり、どんな動きが出てきたのか。

### 観光を軸に島全体の活性化を

主力産業である漁業も将来に不安を抱え、観光業との連携に活路を求める。甌島にはどんな地域資源があるのか。観光業に期待される真の役割とは何か。そして、どんな観光交流を目指し、そのためにはどんな準備が必要なのか。

### 市も積極的にバックアップ

九州新幹線の全線開通を来年三月にひかえ、観光事業の振興に力を入れている薩摩川内市。観光において甌島はどう位置づけられているのか。市はどんな活動を始めているのか。甌島をどうバックアップしようとしているのか。

## 「甌島で、つくる。」 KOSHIKI ART PROJECT とは

「甌島で、つくる。」をスローガンに、平成16年からスタートしたアートを核とする地域活性化プロジェクト。その目的は、島外のアーティストとの交流を手段として、甌島に伝わる文化・暮らし・自然の豊かさなど、「甌島にあるもの」の素晴らしさを島民たちに見直してもらうきっかけを創ること。また同時に、島外の人に甌島の魅力を伝えていくことにある。社団法人日本経営協会が主催する自治体総合フェア2009において「第一回活力協働まちづくり推進団体表彰」最優秀プロジェクトに選ばれた。里町一帯を開催地とし、昨年からは上甌町も加わった。次の4つのプロジェクトから成り立っている。

### ① KOSHIKI ART EXHIBITION

代表の平嶺林太郎さんがセレクトした若手アーティストが、毎年8月の1か月間島内の空き家に滞在し、創作活動を行う。出来上がった作品は、8月最終週の1週間、空き地・空き家・空き倉庫などを使って展示される。

### ② じょうやま音楽祭

甌島に伝わる伝統芸能や島唄を復活させることを目的に、平成20年から開催された。里町の亀城跡地を会場に、島で活動する団体や伝統を守る保存会、島外のアーティストが「甌島」をキーワードに歌と演奏を披露する。

### ③ たまいしプロジェクト

※9ページで紹介

### ④ 甌 MOYAI 塾

「島の文化は日々の暮らしから生まれる」をキーワードに、地域住民を対象として昨年からは開催された塾。様々な分野の外部講師を招き、テーマごとに講師・学生・地域住民が一緒になって甌島の価値を見出し、可能性を探る。



事務所兼創作場所



子供たちとのワークショップ。スタッフ、アーティスト、島の子供たちが協力してアートを創作する。

アートは島のいたるところに展示される。写真は、相川啓太さんの作品「一筆描きのホシ」(平成20年)。

甌島で、つくる。KOSHIKI ART PROJECT 公式ブログ ▶ <http://koshikiart.chesuto.jp/>

### ■ 甌島列島

川内川河口の西方、東シナ海上約26kmのところの上甌島・中甌島・下甌島の3島と無人の小島が連なる。全長約35km、面積約119km<sup>2</sup>、人口約5,800人(平成22年2月現在)。串木野新港からフェリーで最速70分、高速船で最速50分。

豪壮な海食崖、特異な湖沼群、鹿の子百合の原生地、緑豊かな常緑広葉樹原生林と、他では見られない自然景観に恵まれている。また、キビナゴ魚を中心とした漁業の盛んな島で、新鮮な魚介類も豊富。

気候は温暖で、年平均気温は17.5℃、年間降水量は約2,500mm。台風銀座といわれるほどの台風の通り道でもある。

平成16年10月、里村(上甌島東部)、上甌村(上甌島西部と中甌島)、下甌村(下甌島中南部)、鹿島村(下甌島北部)の甌島4村と本土の1市4町が合併し、薩摩川内市となった。

※以下、旧里村→里町、旧上甌村→上甌町、旧下甌村→下甌町、旧鹿島村→鹿島町と表記

# CHAPTER 1 若い創造力が島民を刺激

とにかくやってみる  
そこから変わっていく

きっかけの一つは、平成十五年の秋に新潟県で見た「大地の芸術祭」だった。上甕島・里村(当時)出身の平嶺林太郎さんは当時、東京造形大学で油絵を専攻する学生。いわゆる「箱もの」の展示会場ではなく、地域の各所でアートを展示するこの芸術祭を見て強い衝撃を受けた。折しも甕島は、翌年に市町村合併を控え、平嶺さんの故郷である里村は無くなることになっていった。「村」を何らかの形で刻みつけたいと考えていた平



KOSHIKI ART PROJECT 副代表  
やました けんた  
山下 賢太 さん

KOSHIKI ART PROJECT 広報/  
薩摩川内市観光協会 甕島案内所  
ひらかね しゅんこ  
平嶺 純子 さん

嶺さんはこの時「KOSHIKI ART PROJECT(以下、アートプロジェクト)」の開催を思いついたのである。翌平成十六年、村最後の成人式で成人代表としてスピーチした彼は、地元でアートプロジェクトを開催することを公に宣言した。「突然のことに家族は反対しましたが、お構いなしに展示場を使う空き家を見つけ、夏には十五人の美術仲間を連れてきてしまいました」と語るのは、林太郎さんの姉であり、現在、甕島観光案内所に勤める平嶺純子さん。彼女はアートプロジェクトの広報担当でもある。

そして八月、第一回のアートプロジェクトを強行開催したのである。しかし、地元住民はもとより、イベントを手伝った家族や空家を提供してくれた人さえ、その意義や目的を理解していなかった。翌年には第二回を開催したが、やはり住民の目には若者たちが何やらワイワイやっているとしか映らなかつた。一部では「若者が騒ぎ過ぎてうるさい」とか、「子供たちに悪い影響を与えるのではないか」という声も聞かれたが、それでも林太郎さんは試行錯誤しつつも毎年の開催を続行したのだ。

## 住民もアーティストも強い影響を受ける

そんな中でちょっとした転機になったのが、スペイン・バルセロナ大学の学生が参加した平成二十年・第五回の時だ。海外からの参加者を迎え、マスコミに大きく取り上げられたことで、一気に住民たちの認知度も上がった。

「地元の人にとって、アートは自分たちの生活に無縁のものだったと思います。でも、毎年続けていくうちに、今年はいつ来るのとか、若い人が歩いているだけでうれしいといった『待ち望む声』も聞かれるようになった」と純子さん。

また、アーティストが海岸の清掃活動や盆踊りなどに参加し、住民とのふれあいも増した。当時を振り返り、アートプロジェクト副代表の山下賢太さん(里町出身)は語る。



草やワラ、玉石など「甕島にあるもの」でアートを創りあげる。時には家や風景までもが作品の材料になる。



倉庫の内壁をキャンバスに見立てて甕島を描いた「home-home」。青木真莉子さんの作品(平成21年)。

「屋外で紐を結びながら作品を創作している者がいたのですが、漁師が通りかかって紐の結び方を教えてくれたというのです。いわば紐結びのプロから思わぬ助言をもらい、これが『甕島で、つくる。』ということなのだと感じていました。アーティストにとっては、便利で慣れた創作環境を離れ、ありのままの自然の中に身を置くことで創作の原点に立ち返ることができる。住民にとっては都会の若者たちとのふれあいから、島の魅力を改めて見直すきっかけとなる。アートプロジェクトが目指すものの輪郭が、だんだんと浮かび上がってきたのだ。

「島での創作が刺激となって、都会に帰ってから才能が爆発するアーティストもいます。住民側も自宅の倉庫の壁を絵画のキャンバスとして提供するなど、協力してくれる人が増えてきました」と山下さんは語る。

## 全国グランプリを受賞

活動も夢せふくらむ

そして昨年、アートプロジェクトは地域活性化への貢献が認められ、全国自治体フェア二〇〇九「第一回活力協働まちづくり推進団体表彰」で全国グランプリを受賞した。この栄誉は島全体や市からの注目度をぐんと高めるとともに、住民の理解や意識も向上させ、里町商工会の青年部を中心に各産業の代表者が結集した「里地域活性化委員会」の発足にもつながったのである。

## 「たまいしプロジェクト」

上甕島・里町に古くから伝わる玉石の石垣を復活させようと、アートプロジェクト副代表の山下賢太さんが中心となり平成20年からスタートした活動。

「昔ながらの風景や物は、そこに住む人々を結びつける力を持つ」との考えから、道路の拡張工事などで失われた玉石垣の再現に取り組み、山下さんの後輩である京都造形芸術大学の学生、地元の高校生、住民らで町の各所に新しく玉石垣を積み上げている。

修復された玉石垣を含む里町の玉石垣は、平成21年4月、国土交通省が認定する「島の宝100景」に選出された。



玉石垣を積み様子



修復された玉石垣

「甕島で、つくる。」というスローガンは、「甕島を、つくる。」という意味だったので、と青年部の人に言われました。島を愛し、島の未来を見つめる私たちの活動を理解してくれたのがうれしかった」と、純子さんは語る。

昨年からアートプロジェクトの開催地は、里町から上甕島にまで広がり、展示会の入場者は前年度の倍になる約六百人(うち約二百人は島外者)を数え、初めて下甕島からも来場者があった。平成二十年には、「じょうやま音楽祭」と「たまいしプロジェクト」、昨年からは「甕MOYAI塾」も加わり、アートプロジェクトは確実に力強い前進を続けている。純子さんは、これまでの成果をこう語る。

「地元の大人たちが理解・協力してくれるようになったとともに、アートプロジェクトを身近に見て、島のために何かしたいという子供が増えてきたことも成果のひとつです。また、伝承者がいなくなるギリギリで八十年ぶりに伝統の盆踊りが復活したことなど、眠っていた島の文化を掘り起こすこともできました。これからも、島のために何ができるかを探していきたいですね」

# CHAPTER 2 観光を軸に島全体の活性化を

## 水揚げ量日本一のキビナゴをブランド化したい

アートプロジェクトから刺激を受け、「自分たちも島のために何かをしなければと思った」と語るのは、里地域活性化委員会の委員長で、ご自身が漁師でもある日笠山誠さんだ。「島は漁場に恵まれています。近年では魚の価格自体が下がり、そのうえ船などの燃料価格も上がっています。今から行動を起こさなければ漁業はますます苦しくなります」

甕島の主力産業は漁業。上甕島ではキビナゴ漁、下甕島ではバシヨウカジキ(アキタロウ)漁が盛んで、他にもメジナ、ブリ、アジ、サバ、イカなど種類も漁獲量も豊富だ。とくにキビナゴは一年を通して漁獲され、実質の水揚げ量日本一を誇る。



里地域活性化委員会 委員長  
ひがきやま まこと  
日笠山 水産 代表 日笠山 誠 さん

五、六月の子持ち時期と、脂ののった冬場のものが人気で、刺身・焼魚・煮付け・天ぷら・鍋しゃぶなど多彩な料理がある。

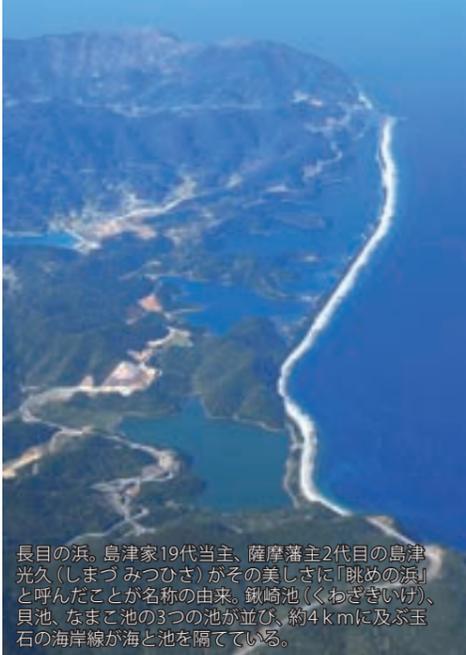
この島の宝ともいえるキビナゴを守るために、甕島四町で漁師たちが資源管理協議会を作り、小さいものを獲りすぎないように網の目の大きさを制限したり、休漁日・操業時間・保護区域での漁禁止などの取り決めをしている。

また、公的助成金である「離島漁業再生支援交付金」を利用してキビナゴをPRするパンフレットを作成し、県内の物産展に出展している。しかし、島には魚市場がない。水揚げした市場で産地表示されるので、一般的に「甕島産」と表示できないのだ。

「これからは島で獲れたキビナゴを島から出さずに、食品加工などをして『甕島産キビナゴ』をブランド化していきたい。加工工場ができれば雇用の創出にもなる。また、観光業などの産業と連携して、新しい漁業のかたちを作っていきたい」と日笠山さんは熱く語る。



キビナゴの刺し網漁の様子。キビナゴは明るいと獲りにくいので、深夜に漁を行う。



長目の浜。島津家19代当主、薩摩藩主2代目の島津光久（しまつ みつひさ）がその美しさに「眺めの浜」と呼んだことが名称の由来。鏡崎池（くわぎきいけ）、貝池、なまこ池の3つの池が並び、約4 kmに及ぶ玉石の海岸線が海と池を隔てている。



甌島はスキューバダイビングの穴場。東シナ海の海流の影響により、南西諸島とは違う「甌ならではの」海の風景が楽しめる。

## 独特の自然美と文化 ユニークな魅力あふれる甌島

甌島には美しい自然はもちろん、全国的にも珍しい地形や文化的な遺跡が数多くある。海岸流で運ばれた海底の砂礫が水面上に現れた「トンボロ（陸繋砂州）」、海と三つの池を隔てて伸びる長さ四キロメートルの玉石の道「長目の浜」、数多くの奇岩が連なる「鹿島断崖」、フランス皇帝ナポレオンの姿に似た「ナポレオン岩」などのビュースポット。亀城跡、武家屋敷跡、キリシタン殉教地などの史跡。夏には甌島が原産の鹿の子



薩摩川内市観光協会 事務局次長 甌島案内所長 純浦嘉孝 さん

「漁業は不安定な要素が多く、これまで盛んだった建設事業も、従来の基盤整備事業はだんだんと少なくなってきました。今後は、結びつく産業の裾野が広い観光業を軸に、島全体の活性化を図っていく必要があると思っています」と語るのは、薩摩川内市観光協会・甌島案内所長の純浦嘉孝さん。  
産業面においては、キビナゴ漁など従来の漁業に加え、新しい産業として、マグロの養殖や海洋深層水を利用した飲料水の販売なども進められており、これらも観光業との結びつきにより、さらに進展する可能性を秘めている。

## CHAPTER 3

### 市も積極的にバックアップ

#### 甌島は市の観光における二本柱のひとつ

薩摩川内市としても、甌島を本土の蘭牟田池と並ぶ観光の二本柱と位置づけている。本土の「グリーンツーリズム（山、川）」、甌島の「ブルーツーリズム（海）」という両輪で情報発信をしていく考えだ。

「外界離島との合併は稀なケース。他の市にはない島の魅力というものを活用していきたい。『宝の島』ともいえる甌島を輝かせることで、薩摩川内市も輝くと思います」と、薩摩川内市商工観光部観光課に勤める甌島出身の村岡斎哲さんは語る。

これまで甌島のPRはパンフレットに頼っていたが、昨年、市は魅力を映像で紹介するDVDを作成。これを旅行エージェントや新聞社など



薩摩川内市 商工観光部 観光課 村岡斎哲 さん

「甌島では、これまで四つの町がそれぞれ個々に観光をPRしてきました。しかし、これからは里町に設けた観光案内所を窓口にして、島全体をひとつに結ぶことが必要だと思っています」と村岡さん。それには市や観光協会、観光案内所のタテの連携とともに、島の住民とのヨコのつながりも大切だという。このタテとヨコの連携で組織が強化され、合併の本来の効果が現れるというのだ。

#### 各町が協力し合って 甌島らしさを発信する

上甌島と中甌島は橋で結ばれているが、下甌島へは橋がなく、定期船を利用しなくてはならない。この不便さを解決するため架橋工事が進められており、十年後には完成する予定だ。

「橋で結ばれば、島にある四町の連帯感もさらに高まるでしょう。その前に基盤となる里地域活性化委員会のような組織を、若い人たちを中心に各町で誕生させたい。そして、観光を基軸として甌島地域の活力を生み出していきたいと思っています。アートプロジェクトも活性化委員会も、活力ある島にしたいという目標は同じだと思っています。お互いの得意なところを活かし合えばいい」と純浦さんは語る。

観光交流事業のために、今後はNPO法人等が立ち上がると思いますが、ブルーツーリズムなど甌島方式の受入れシステムづくりが急務です。それらをコーディネートできたり、ツアーガイド、インストラクターなどの人材を島内で育てたいが、それにこだわらず外部からでも採用できればという。

また、島をPRするだけでなく、観光客の受け入れ体制を整えることも重要課題だと考えている。たとえばツーリズム企画の内容充実、食事をする場所や宿泊先、交通の整備、地元ガイド育成などである。市としては観光協会と連携して、ツーリズムやガイド養成の研修会を開催するなど、甌島の観光振興を積極的に応援していく方針だ。村岡さんは語る。

## 「本物」の交流を目指して 島らしさに心をこめる

「合併後五年が過ぎましたが、まだ効果は見えないかもしれません。でも、十年後、島のために『合併してよかった』と心から思ってもらえるように、今こそ取り組まなければならないと思います」  
島を想う若い人たちから刺激を受け、島の未来づくりに真剣に取り組み始めた島民たちと、それを支える市…。夢をデザインして前進する、これからの甌島に注目したい。

下甌島の鹿島断崖付近では、ウミネコが子育てをする4～6月の間、生息地の近くに船を出し、クルージングしながら餌付けをする体験ができる。



### ■太古のロマンに包まれた甌島

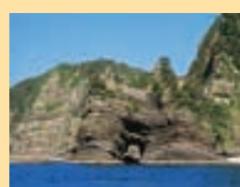
長目の浜に隣接する貝池には、他に世界で2ヶ所で見つからない約30数億年前のバクテリア「クロマチウム」が生息している。貝池の湖底の水中には酸素がまったく溶けておらず、光合成を行うバクテリアが集まってマリンスノーとなり、湖底に降り積もっているのだ。

また、地層が剥き出しになった断崖が多く見られ、白い砂岩と赤い泥岩の繰り返しからなる地層は、白亜紀（約8千万年前）から古第三紀（約5千万年前）のもので、「日本の地質100選」に認定されている。

さらに、下甌島では近年、恐竜の化石が発掘された。まるで太古の昔にタイムスリップしたかのようなロマンを感じさせてくれる島—それが甌島だ。



貝池。学術的に貴重な池として、地質学者から注目されている。



鹿島断崖（鶴穴）。下甌島にはこのような断崖が多くみられる。

トンボロ。海底の砂礫（されき）が海岸流で運ばれ、波の作用によって水面上に現れたもので、島と島をつなぎ、細長く低い地形をしている。里町の中心部はこの地形の上に集まっている。

本財団の事業運営に際しましては、平素より格別のご高配を賜り誠にありがとうございます。おかげさまで、本財団は平成二年七月設立以来、電源市町村をはじめ関係団体の皆さまより多大なるご支援とご協力をいただき、本年七月には設立二十周年を迎えることができます。

昨年より電源市町村をはじめとする皆さまに広くご意見をお伺いするとともに検討を重ね、この度、平成二十二年度事業につきまして下表のとおり計画いたしました。各事業につきましてご不明な点等ございましたら、お気軽にお問い合わせください。

なお、事業のご利用にあたりましては、参加費用の増や、実費負担等をお願いすることとなりますが、今まで培ってきたノウハウを活かし、これまでも増して内容の充実を図り、皆さまのお役に立つて参りたいと考えております。つきましては、今後とも本財団の事業をご活用いただきますようお願いいたします。

また、三月に新事務所へ移転いたしました。自治体の皆さまが打合せなどに無料でご利用いただける会議室も引き続き用意しておりますので、東京へお越しの際はお気軽に本財団へお立ち寄りください。



商品試験販売事業



商品相談・商談会



国内研修



海外研修



イベント事業



国内研修

## 相談事業

電源地域の抱えている課題など、お気軽にご相談ください。

## 参加募集型事業

### ■人材育成事業(研修事業)

電源地域の人材育成を支援するため、電源市町村の職員、農協、漁協、商工会などの各種団体職員や住民等および電力会社等の職員を対象に、国内および海外研修を実施します。平成22年度は、地域の活性化に係るニーズの高いテーマを基本とし、最適な講師による講演、先進事例の紹介、日常業務に即したケーススタディ等による具体的で実践的な内容を中心に実施します。

### ■商品相談・商談会

電源市町村の地域資源のブランド化等を支援することを目的に、各地域で生み出された特産品の「商品相談・商談会」を実施し、地域産品と流通バイヤーとの面談の機会を創出することで、販路拡大につなげるとともに、バイヤーから具体的なアドバイスを受け産品の開発・改良を図ります。

### ■商品試験販売事業

都市圏の百貨店やスーパーなどにおいてテストマーケティングを行い、出店の機会を提供するとともに、流通の専門家による様々なアドバイスを通じて、実地に即した販売促進を支援します。

### ■企業誘致支援サービス事業

企業訪問活動などの全国横断的な活動を必要とする業務や全国規模でのアンケート調査など、自治体単独では容易ではない活動の代行サポートを行い、自治体の東京事務所的活動を展開します。

電気のふるさと  
活性化

## 個別対応型事業

### ■専門家派遣事業

電源地域の抱えている課題の克服や問題の解決に向けて、地域振興に関する各分野の専門家による現地指導を実施します。対応する分野は、特産品振興や観光開発、企業誘致や産業振興、各種行政支援など広範なものとし、各種コンサルティングや実務指導、講演会などを行います。

### ■調査事業

電源地域の活性化につながる各種調査を実施します。対応する分野は、各種計画策定や特産品・観光に関するマーケティング、企業誘致に関する分野などを中心とし、広範なテーマに対応します。

### ■イベント事業

各種イベントの開催支援を行います。対応する分野は、シンポジウムや講演会、首都圏等大消費地への物産・観光PRを中心とし、ニーズに応じて多様なテーマに対応します。

## その他の各種事業

### ■広報事業

● 広報誌「電気のふるさと」の発行や配布

### ■原子力発電施設等周辺地域企業立地支援補助事業

● 原子力地域に立地する企業への補助金審査及び交付

### ■原子力立地給付金交付事業

● 原子力発電施設等の周辺地域の住民や企業などへの原子力立地給付金の交付

## 国等公募事業

国等からの受託事業を通じて、関係の皆さまに各種サービスをご提供させていただきます。

お問い合わせ先  
 (財)電源地域振興センター 総務企画部  
 電話：03-6372-7311  
 e-mail: soumu@dengen.or.jp #67

# 平成22年度上期原子力発電施設等 周辺地域企業立地支援給付金について

本給付金は、原子力立地地域における雇用機会の創出と産業振興を図るため、雇用の増加を生む企業に対して、一定期間にわたって、企業の支払った電気料金等に基づき、道府県が給付金を交付する制度です。当センターでは道府県からの要請を受けて交付事務・審査事務を行っています。平成22年度上期は北海道、青

森県、宮城県、福島県、新潟県、茨城県、静岡県、石川県、福井県、滋賀県、京都府、島根県、愛媛県、佐賀県、鹿児島県の審査事務等を行う予定です。平成22年度上期募集は平成22年4月頃行われる予定です。詳細は募集時の「応募要領」をご覧ください。「応募要領」は、当センターのホームページに掲載する予定です。

お問い合わせ先  
 (財)電源地域振興センター 立地審査課  
 電話：03-6372-7307  
 e-mail: ritti@dengen.or.jp

## 初めて申請される場合

### ■主な補助要件

- 【電力契約】…新規立地または増設に伴う電力契約の新設または増設をしていること。
- 【対象となる電気料金】…①平成21年10月1日～平成22年3月31日に支払った電気料金であること。  
②申請者が直接契約しているものであること。  
③産業用途の電力契約で、臨時契約等期間に制限があるものでないこと。

- 【雇用】…雇用者（雇用保険の一般被保険者）が3人以上増加すること。
- 【投資】…（「特例給付金」を受ける場合のみ要件とする。）

新たな投資額：所在市町村 新設 500万円（増設250万円）以上  
 隣接市町村 新設1,000万円（増設500万円）以上

※特例給付金とは、製造業および自治体で支援制度を整備している特定業種に対して行う、新規に採用した人数に応じた加算のこと。

### ■交付対象期間

立地（新増設）した翌年から原則8年間で、要件を満たす期間については、継続して交付を受けることができます。ただし、前述のとおり、電気料金の支払実績等に基づいて金額が決まるので、都度（上期・下期の年2回）申請して頂く必要があります。

### ■交付額(算定交付額(A)と交付限度額(B)のいずれか小さい額となります)

#### ●算定交付額(A)：電力給付金分交付額(I) + 特例給付金分交付額(II)

(表1)

#### ・電力給付金分交付額(I)

①以下の計算式より算出単価(kWあたり)の電気料金を計算する。

$$\text{算出単価} = \frac{\text{半期における実支払電気料金}}{\text{実契約電力} \times \text{半期における支払月数}}$$

②①で算出した値を表1に当てはめ、算定単価を求める

所在市町村、隣接市町村(旧隣接)：第1欄  
 隣接市町村(旧外部)：第2欄

算出単価	算定単価	
	第1欄	第2欄
～1,500円未満	750円	375円
1,500円以上2,500円未満	1,000円	500円
2,500円以上3,500円未満	1,500円	750円
3,500円以上4,500円未満	2,000円	1,000円
4,500円以上5,500円未満	2,500円	1,250円
以降1,000円刻み	以降500円刻み	以降250円刻み

③以下の計算式により電力給付金分交付額を算出する。

$$\text{電力給付金分交付額} = \text{算定契約電力} \times 1 \times (\text{算定単価} - \text{交付金単価} \times 2) \times \text{支払月数}$$

(表2)

※1 算定契約電力は、表2の区分に応じた電力を上限とする実契約電力  
 ※2 交付金単価とは、原子力発電所の設備能力に応じて設定している単価

増加雇用者数	上限
3人以上20人未満	1,500kW
20人以上	2,500kW

#### ・特例給付金分交付額(II)

【所在市町村】：新規に雇用した人数 × 30万円 ※期末の雇用者数  
 【隣接市町村(旧隣接、旧外部)】：新規に雇用した人数 × 15万円 ※期末の雇用者数

#### ●交付限度額(B) ※交付限度額は(1)(2)のいずれか小さい額となります。

- (1) 算定電気料金交付限度額：算定契約電力 × (算定単価 × 係数1 - 交付金単価) × 支払月数
- (2) 支払電気料金交付限度額：半期における実支払電気料金 × 係数2 - (実契約電力 × 交付金単価 × 支払月数)

市町村区分	係数1	係数2
所在市町村	2	1
隣接市町村(旧隣接)	1.5	0.75
隣接市町村(旧外部)	2	0.50

## 既に本給付金の利用実績のある方が増設として申請する場合

本制度の交付期間は原則8年間ですが、増設した場合に次に掲げる要件を満たせば、増設の翌年から原則8年間になるまで期間を延長することができます。ただし、1事業所2回までに限ります。

- 【電力契約】…工場または事業場の増設に伴い契約電力が増加していること。
- 【対象となる電気料金】…①平成21年10月1日～平成22年3月31日に支払った電気料金であること。  
②申請者が直接契約しているものであること。  
③産業用途の電力契約で、臨時契約等期間に制限があるものでないこと。

- 【雇用】…雇用者（雇用保険の一般被保険者）が3人以上増加すること。
- 【投資】…新たな投資額：所在市町村 250万円以上、隣接市町村 500万円以上
- 【対象業種】…製造業および自治体で支援制度を整備している特定業種であること。

※本制度は平成20年度以降に増設があったものが対象となります。平成19年度以前の新増設は、旧制度の適用となります。

## 【読者プレゼント】

今号の「トップにきく」にご登場いただきました薩摩川内市役所のご厚意により、芋焼酎「六代目百合」を五名様様にプレゼントいたします。

とじ込みのアンケートはがきに本誌へのご意見、ご感想などをご記入の上、郵送またはFAXでお送りください。FAXの場合は、アンケートはがき両面の質問項目の回答を紙(A4サイズ)に記入してお送りください。ハガキが切り取られている場合は、(財)電源地域振興センター 普及啓発課(電話：03-6372-7312)までご連絡ください。



今号のプレゼント  
 甕島の芋焼酎「六代目百合」  
 (容量：720ml アルコール度数：25度)

お待ちしております。当選の発表は発送をもって代えさせていただきます。

FAXでのプレゼント応募先：  
**03-6372-7301**  
 (財団法人電源地域振興センター 普及啓発課)

「六代目百合」に関するお問い合わせ先  
**塩田酒造株式会社**  
 〒896-1101  
 鹿児島県薩摩川内市里町里1604  
 電話：09969-32006

## 【事務所移転のお知らせ】

このたび当財団は事務所を移転し、平成二十二年三月一日(月)から通常業務を行っております。今後ともよろしく願いたします。



## 【今号で紹介した電源市町村の発電所データ】

◆表紙/トップにきく/PICK UP!  
 鹿児島県薩摩川内市 P.2を参照

◆産品自慢  
 京都府京丹後市  
 宮津エネルギー研究所 隣接事業者名：関西電力株式会社

## 【人事往来】

(敬称略)

### ●電源立地都道府県知事(平成21年11月～平成22年1月選挙分)

都道府県名	氏名	当選月日
広島県	湯崎 英彦	11月8日

### ●電源地域市町村首長(平成21年11月～平成22年1月選挙分)

市町村名	氏名	当選月日
熊野市(三重県)	河上 敢二	11月1日
長和町(長野県)	羽田 健一郎	11月3日
西和賀町(岩手県)	細井 洋行	11月8日
一戸町(岩手県)	稲葉 暉	11月8日
酒田市(山形県)	阿部 寿一	11月8日
福島市(福島県)	瀬戸 孝則	11月8日
神栖市(茨城県)	保立 一男	11月8日
都留市(山梨県)	小林 義光	11月8日
甲州市(山梨県)	田辺 篤	11月8日
呉市(広島県)	小村 和年	11月8日
山口市(山口県)	渡辺 純忠	11月8日
上毛町(福岡県)	鶴田 忠良	11月8日
いちき串木野市(鹿児島県)	田畑 誠一	11月8日
幌加内町(北海道)	森谷 廣	11月10日
猿払村(北海道)	巽 昭	11月10日
射水市(富山県)	夏野 元志	11月15日
木曾町(長野県)	田中 勝巳	11月15日
京丹波町(京都府)	寺尾 豊爾	11月15日
神河町(兵庫県)	山名 宗悟	11月15日
紀の川市(和歌山県)	中村 慎司	11月15日
霧島市(鹿児島県)	前田 終止	11月15日
南さつま市(鹿児島県)	本坊 輝雄	11月15日
真室川町(山形県)	井上 薫	11月17日
広野町(福島県)	山田 基星	11月17日
二本松市(福島県)	三保 恵一	11月22日
双葉町(福島県)	井戸川 克隆	11月22日
奄美市(鹿児島県)	朝山 毅	11月22日
湯沢町(新潟県)	上村 清隆	11月29日
本山町(高知県)	今西 芳彦	11月29日
樺原町(高知県)	矢野 富夫	12月1日
相馬市(福島県)	立谷 秀清	12月20日
関川村(新潟県)	平田 大六	12月20日
竹原市(広島県)	小坂 政司	12月20日
錦江町(鹿児島県)	楠元 忠洋	12月20日
鯉ヶ沢町(青森県)	東條 昭彦	12月27日
二戸市(岩手県)	小保内 敏幸	1月17日
南相馬市(福島県)	桜井 勝延	1月17日
長南町(千葉県)	藤見 昌弘	1月17日
紫波町(岩手県)	藤原 孝	1月19日
勝浦町(徳島県)	中田 丑五郎	1月19日
豊浦町(北海道)	工藤 國夫	1月24日
平川市(青森県)	大川 喜代治	1月24日
花巻市(岩手県)	大石 満雄	1月24日
喜多方市(福島県)	山口 信也	1月24日
伊達市(福島県)	仁志田 昇司	1月24日
大多喜町(千葉県)	飯島 勝美	1月24日
五泉市(新潟県)	伊藤 勝美	1月24日
立山町(富山県)	舟橋 貴之	1月24日
裾野市(静岡県)	大橋 俊二	1月24日
綾部市(京都府)	山崎 善也	1月24日
松浦市(長崎県)	友広 郁洋	1月24日
宮崎市(宮崎県)	戸敷 正	1月24日
都城市(宮崎県)	長峯 誠	1月24日
延岡市(宮崎県)	首藤 正治	1月24日
阿智村(長野県)	岡庭 一雄	1月26日
一色町(愛知県)	都築 讓	1月26日
大台町(三重県)	尾上 武義	1月26日
神川町(埼玉県)	清水 雅之	1月31日
有田川町(和歌山県)	中山 正隆	1月31日
築上町(福岡県)	新川 久三	1月31日
玖珠町(大分県)	朝倉 浩平	1月31日
美郷町(宮崎県)	菊田 彦市	1月31日
志布志市(鹿児島県)	本田 修一	1月31日

産品  
自慢

# 丹後藤布

(京都府)  
京丹後市

先人の知恵と技術を受け継ぎ、現代の生活空間へ  
丹後の山野が育んだ藤蔓が生みだす素朴かつ力強い織物



(上) 藤布を使って作られた能衣装「シケの水衣」。

(左) 藤蔓から糸をつくるには多くの工程を要する。枝の出いていない親指大の藤蔓を伐り、皮を剥いで、その中皮を灰にまぶして、長時間炊いた後、小川で洗い流して繊維を取り出す。それを細かく割いて、績んで長い糸にしていく。



(右) 藤布と絹を融合させた和装の帯

京都府丹後地方の織物といえば「丹後ちりめん」がよく知られています。これと並ぶ逸品に「丹後藤布」があります。藤布の歴史は非常に古く、縄文時代にまでさかのぼります。古来、人々は山野に自生する藤蔓の皮を剥ぎ、木灰で炊き、績んで（繊維を長くつないで糸にすること）衣服を織り、身にまとっていました。明治時代までは全国で織られていたことが、製造には大変な労力と技術を要することや、木綿の普及に伴い衰退し、藤布の文化は消滅したものと思われていました。ところが、昭和三十七年、丹後地方でその製造が続いていることがわかり、以後、地元の人々を中心となって「丹後藤織り保存会」「丹後藤布振興会」を設立し、技術の伝承に取り組んでいます。

京都府丹後市網野町で明治時代より続く機屋「遊絲舎」を営む小石原将夫さん。もともと、絹織物の帯を織っていました。が、織物の製造に携わる者として「衣服の原点である藤布を知らなければいけない」との思いから、その技術の保存に力を注ぐようになりました。技術を伝承していくために、藤布を製造していた丹後地方の山あいの集落に通い、そこで糸作りから織り方までの全工程を学びました。今では、絹との融合を図った織物など、現代の生活様式に合う製品の開発に取り組んでいます。現在、藤布の製品は和装の帯や草履をはじめ、座布団、照明器具のインテリアなど多岐にわたります。また、藤布を世界に発信するため、経済産業省「JAPANブランド育成支援事業」の認定を受け、数年前からパリで展示会を開いています。藤布はその色合いや感触が評価され、フランスの高級ブランドから注目されるようになり、現在ではパリコレクションに出品する衣服の生地注文も入るようになりました。さらに、藤を活用した地域おこしにも取り組んでいます。良質な藤の繊維を安定的に採取するため、昨年、京都府の「地域力再生プロジェクト支援事業」の認定を受け、藤布の一貫工程を行う施設「衣のまほろば『藤の郷』」を開園しました。将来的には作業が体験できる工房を設ける予定で、織物産業と観光資源を融合させる新たな試みとして注目されています。「古代の衣」藤布は今、職人の手によって新たな息吹が与えられ、最高級の帯地素材として活躍しています。

●お問い合わせ先／木の布工房「遊絲舎(ゆうししゃ)」 TEL:0772-72-2677 <http://www.fujifu.jp/>